

まち・潮まち・港町

# みたらし・ふれ・通館

町並み保存地区みたらし情報誌

## 特集

### 俳句をめぐる旅

- みたらし物語  
流れ来たり、流れ去る  
ものとしての文化.....2
- この人に聞く  
秋光道女を訪ねる.....3
- 御手洗・大長・久比  
句碑めぐり・歌碑めぐり.....5
- 出版にみる豊町俳句事情  
句・歌集列伝 .....7
- 豊町の味自慢【久比のお好み焼】9



御手洗 重伝建を考える会



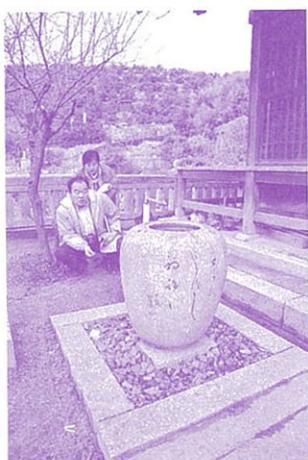
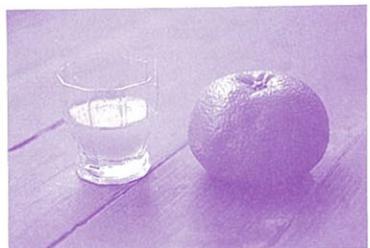


### 御神衣祭り

地元では「お布（きぬ）替え」と呼ばれる宇津神社の神事。春と秋の衣替えの時期、神様も着替えをなさるという。雅楽の演奏の中、真夜中の神事はまさに夢の中の出来事のようだ。



みたかー通信  
2000.3. No.5



天満宮境内の手洗鉢  
特集の「句碑めぐり・歌碑めぐり」のため御手洗を中心にして島内の碑を散策するスタッフ。こんな意外なところにも句が残されており、風流な心意気に感心させられた。

道女さんのオリジナル蜜柑酒  
密柑の外皮をむぎ、身をミキサーにかけて絞る。そのままほおつておくと、透明な上澄み液ができる。その上澄み液だけをすくい、焼酎と少しの砂糖で発酵させ、一升瓶で保存する。あっさりとしたワインのようなお酒ができる。

# 流れ来たり、流れ去るものとしての文化

大長の宇津神社で年に二回行われる御神衣祭り（お衣替え）と、御手洗の夏の例大祭で雅楽が演奏されているが、これはいつたいいつどこから伝わってきたものであろうか。

文献によれば、大長の越智という人が1774年、雅楽を宮島の熊野清鑑という人から教わったということが記されている。したがって、御手洗の雅楽は大長から伝わってきたものらしいということは容易に想像がつく。では宮島の雅楽はどこからつたわってきただのか。

そもそも、日本の雅楽はどこからきたものなのか。

日本の雅楽は三韓楽（新羅・百濟・高句麗）と、吳（伎）樂、唐樂などが渡来し、それらが日本の風土と伝統の中で日本的に純化していくものであるということが分かっている。

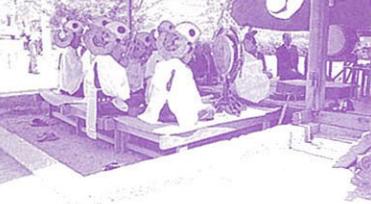
もともと中東あたりから発生したもののが、シルクロードを通り、敦煌を抜け、中国、韓国をくぐつて日本に届いたさまざまな文明・文化は、われわれの想像をはるかに越えた距離と時間をへて豊町にたどり着いたものなのだ。

こうして届いた大長の雅楽もいまや廃れようとしている。御手洗に残されているものも風前の灯となりつつある。

このように御手洗には北前船によつて、たくさんの文化がもたらされ、たくさんの文化が流れ去つていった。

今回「みたらし通信」は豊町に残され、現在も生き生きと活動している俳句を特集してみた。

いつの時代にかこの島に流れ来た文化としての俳句であるが、われわれの努力でなんとか流れ去らないようにしたいものだという願いを込めつつ。



「夏の例大祭」住吉神社にて

「どんでもない所に美が潜んでゐる。  
風景に自分で味をつけなきや。」

夫・泉児の跡を継ぎ、島の俳句文化を守る秋光道女さん

俳句の盛んな豊町。近年では、大長の故秋光泉児（本名：闡二）氏の活躍がめざましい。彼は、近世俳壇の第一人者・水原秋桜子氏の愛弟子で、「馬酔木（あしひ）」同人。地元俳句同好者のために、たびたび秋桜子を島に迎えた。秋桜子の講演会には、大崎上島の同好者は別船を仕立てたという逸話が残っている。

秋光道女さんは、その泉児氏の妻。夫と同じく俳句の造詣が深く、すぐれた随筆家としても知られている。今年1月、句集「真屋の帆」、隨筆集「茧」を同時出版した。



秋光道女（84歳）  
あきみつみちじょ

本名は道子。1916（大正5）年、北海道苫小牧町生まれ。大長の開業医、闡二（せんじ）氏と結婚。夫婦で水原秋桜子に心酔して「馬酔木」に投句する傍ら、夫が主宰する「早苗」で活動する。一時作句を中断していたが、夫の死で「早苗」を継承。現在「早苗」名誉主宰。

「風景をそのまま写生してたんじや、みな同じ句になるでしょ。自分で味付けしなくちゃ。筆を加えなきや」島に嫁いできたのが、昭和十三年。以来、開業医でもあり俳人でもある夫の泉児さんと一緒に、内海特有の風光明媚な景色を十七文字に詠み続けた。

### 真名の帆遠のくばかり夾竹桃



小路の向うに見える洋館が旧秋光医院。

昭和二十四年に水原秋桜子氏の「馬酔木」に入会し、三年目に初めて五句入選した時の句だ。鴨や蜻、鶉などの生物、蜜柑やレモン、海藻や潮の香り、曼珠沙華や除虫菊など、目前で繰り広げられる自然の営みのすべてが季語となつた。子供も二男二女に恵まれ、精神的にも充実した作句活動だったが、昭和三十年に中断している。「よんどころなき家庭の事情により」としか当人は語らうとしないが、病気がちな義理の姉様が一人になられたのを秦じて、「家にいらしていただきましょう」と夫に

申し出で、きつぱりと俳句をやめたそうだ。秋光道女の俳句は「馬酔木」から消えることになつたが、隨筆欄には時折、日々の心模様を軽やかに書き記している。また、夫の選句作業などを補佐しながら、俳句の世界に心をつないでいたのだった。

ある日、選句稿の中に一人の被爆女性の作品が目とまつた。彼女は、閃光の瞬間に氣を失つていたという。傍らの子供の亡骸と、その子が胸に抱いていた夫の右腕を抱いて、十五キロも離れた夫の実家へ向かううちに彼女は道に迷ってしまった。夜露に濡れた草の上でも然としていると、一匹、二匹と虫が現れ、道案内をしてくれたという身の上が分かつた。

彼女は、やがて全員となり、夫と子供の遺骨を入れた弁当箱を胸に

抱いて肺ガンで亡くなつてしまつた。俳句が、彼女の生命の灯火であつたことはいうまでもなかつた。軍医だった夫も、陸軍病院の同僚を探すために投下直後の広島へ入つていつた。「夫は月に二、三回は鼻血を出していました。原爆症だつたと思います」『董の彼女』に平安を願つた夫が急逝したのが、平成四年のことだつた。



自然の営みを愛する道女さん。この庭からも秀句が生まれる。

### 逝く夫に酒かせ露か寒の水



座敷からも庭が一望できる

夫が亡くなった後、三十五年間の休詠を破つた句だ。舵取り役のいなくなつた「早苗」を守りたいと、俳壇に復帰。「夫はこれだけの人口で…とあきらめていましたけれど、俳句は人のためでなく、自分の人生の生きた証に作るんだと言つてましたから引き受けた以上はやろうう」と。現在も、風の声や庭に現れる小動物の中に夫の声を聞きながら、月間で句誌を発行し、月二回の句会を自宅で継続している。

# 句碑めぐり・歌碑めぐり

いたる所に句碑や歌碑の建つ大崎下島は、文字通り「俳句の島」と呼ぶにふさわしい。「風待ち潮待ちの港」として江戸時代に繁栄した御手洗には、文化人もたくさん来島している。これらの文化人たちが、内海のすばらしい風景を愛で、絵筆を取り、俳句を詠んだ。

このような雰囲気が島民の胸に詩情を芽生えさせ、育み、明治時代の神社奉納俳句から続く、戦後の俳句ブームを生み出していった。

## ①菅原道真公の歌碑

我たのむ人をむなしくなすならば  
天が下にて名をやなかさん

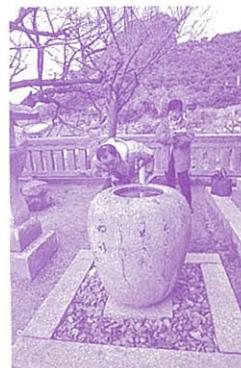


天満宮境内（御手洗）

天満宮境内（御手洗）

## ③木村喜之助（翠山）の手洗鉢の句

美多らしにわが影うつし初詣



## ⑤大原屋墓石の碑

疇なく江の秋ばかりばかりかな



満舟寺境内（御手洗）

## ⑥栗田権堂墓



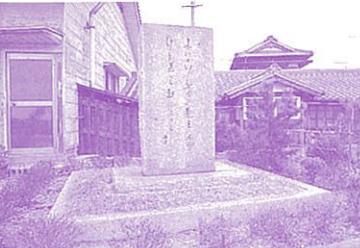
満舟寺境内（御手洗）

## ②飛彈桃十句碑

花美柑の香の高まりに夜潮満つ



天満宮境内（御手洗）



鞆田家別荘海岸道路緑地帯（御手洗）

## ⑦野口雨情作詩「御手洗ぶし」の石碑

来いどうなら観音崎の  
汐は荒くも越してゆく



満舟寺境内（御手洗）



オレンジラインをバックに  
⑩⑪水原秋桜子と秋光泉児の  
師弟句碑が並ぶ。



8 町田喜章の歌碑  
御手洗港は居統けどう  
そして神輿の据えどこう



恵比須神社前（御手洗）



11 水原秋桜子句碑  
冬紅葉海の十六夜照りにけり

豊中学校付近芦浦海岸

10 秋光泉児句碑  
仕手鳴声志ては舞ふ初日の出

9 枝長真三歌碑  
石椎の高嶺に生れし風花か  
陽にかがやきて灘を越え来つ

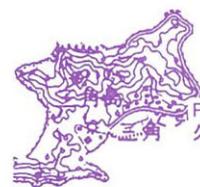


4 芭蕉句碑  
海くれて鳴の声ほのかに白し



久比海岸通り

12 久比の歌碑  
久比の下がり松三里も沖に  
出船入船の邪魔になる



P.9 久比のお好み焼き



# 句・歌集列伝

●出版にみる豊町俳句事情

豊町のなかで、句を愛し和歌を好んだ人々の手によっていくつかの句集・歌集が編まれている。

そのなかで最も古いと思われる

花盛ちるより外はなかりけり  
けきの春荷處そに誰ぞ草枕

等で有名な栗田樗堂の「浮窓集」であり、「西木集」であるがこの人は別格である。

近年ではその樗堂の墓を

秋草たむけむ檍葉の墓は鳥帽子型と詠つた飛彈桃十の「塵光」が昭

和四十一年十一月に上梓されている。この「塵光」は前半が俳句、後半は和歌という構成になつており、桃十

の多芸多才さを伝えている。  
百八日自退院しかへりを部屋部屋を

ものめづらしく見てまはるなり

それよりさかのぼること七ヶ月、同年三月に秋光泉児の第一句集「青苔集」が出版されている。

この句集は「秋光泉児君の句風の変遷を語るには、まず君の住む大長

島のことを考えねばならぬ。」といふ

水原秋櫻子の序文から始まつてある。

渡場の灯に寒潮の落ちゆけり  
木枯れて風雨を常の草短かし

昭和四十九年になり、北川蚊居によつて、「花檍櫻」が上梓されている。この句集のあとがきの中に「ホトトギス」の流れを汲む「南潮舎」の結成と出版当時の現状と、俳人・鈴鹿野風呂との交友などが簡潔に記されている。

棲堂忌修す墓脅は秋の伊予の海

炭の香のなつかしき朝臺寺近し  
てゐる。

棲堂忌修す墓脅は秋の伊予の海  
百八日自退院しかへりを部屋部屋を  
ものめづらしく見てまはるなり

同年九月、宮城都昭の「花蜜柑」が上梓されている。

これの序文は當時「早苗」の主宰であつた秋光泉児が筆をとり、都昭の優雅と穩健を賞めている。

たそがるる宋山千の画の淋しげに  
柿に照る日さし及べり古き陶

昭和五十一年になつて、大島良造の歌集「島の歌情」が上梓されている。

御手洗には古来より多くの歌人が訪れ、景色や人情をうたつてゐるが、

和歌のみとしてまとめられているものはこれよりほかに見当たらない。

発行者、序文とともに歌人・山本康夫が手がけている。

冬西の潮巻ましぶき虹立ちぬ  
我が乗る船は波かぶりつ

後の世に歌残さんと作りたる  
この山と海の島のかなしき



満舟寺境内の栗田樗堂墓

## 昭和五十六年、秋光泉児の第二句集「仕手鷗」が上梓されている。

この句集の帯に「私にのこされた楽しみの第一は、貴兄の第一句集が出来て、そのお祝いのために島まで参上し、句碑の裏で釣りをすることでした」という秋櫻子の言葉があり、

この師弟の強い絆を感じさせる。ちなみにここに出てくる句碑とは葦の浦に在る師弟句碑のことである。

銀河濃し死の認知にて帰る灘  
遠望の異の眼となり鳴引けり

平成に入り、四年十一月川下愛子の「落花の舞」が上梓されている。

この句集の序文は泉児亡き後「早苗」の主幸となつた秋光道女によつて記されているが、「農家の妻として又嫁として且つ母として…」の愛子を驚嘆しつつ褒め称へている。

明易き始發の船の一汽笛

天道虫会ふたび曲がる母の背に  
続いて平成七年藤田憲一の遺句  
集「花みかん」が上梓された。

この句集はある時作者が「拙くても良いから生涯の記念に句集を出したい。生きてきた証に」と言われたことを、その亡き後奥様が実現したものである。

この句集は「前略」二十数年に亘り、亡父一周忌の供養として出版したものであります。(後略)とあとがきに記されているとおり、田宗の子息・純生により編集出版されています。この出版に際し、俳人・松本三余は「純生さんの孝養の誠に徹したものと謂える・」と称へている。

春潮の汀にあまへ寄する波  
瀬戸の海ゆるやかに漕ぐ花見舟



芦浦海岸に並んで建つ、水原秋櫻子句碑(左)と秋光泉児句碑。

平成八年には田中圭吾によつて「慕情」が上梓されている。

序文と跋文に、自分が俳句を始めた動機と現状が簡潔な文章で余すところなく記されている。

農船の水棹で撥ねし春の月  
流水の軋む四鳥ばつ還る

もつとも近いところとなるが、今

年(2000年)一月秋光道女の「眞昼の帆」が上梓された。

高齢に達しながら、なお「早苗」の名譽主として譽讃としている。られる道女の句集として、この句集がわれわれに与える感銘は大きい。

海の色日々に明るく東風となる鹿の子の遠目の先に虹かかる

ちなみにこの句集と同時に出版された同作者のエッセイ集「董」はその序文に「道女さんの文章は長からず、短からず、読み易く楽しくて読む人を虜にしてしまう」と俳人・

水原春郎が絶賛しているものである。



今年、同時出版された秋光道女さんの「董」(右)と「真屋の帆」。中国新聞の新刊紹介でも取り上げられた。

# みたらしやの伝言板

年代物の鐵板が2台



場所は元豊高校前



御手洗出身の明智奈々美さん（57歳）が「家業の金物屋の軒先で始めたお好み焼き屋さん」。 「ちょっと商売でも」と思いついたのが「御手洗の子」らしいところ。かわいらしい二枚の鐵板で、英語が堪能な（主人の稔さん（57歳）と仲良くジユージュ）。ベトベトするけえ、モヤシは入れずにキ

ヤベツだけ。市販のゆで麺はよう使わんの。乾麺をゆがくんよ」ということわりから生まれた爽やかな味。しかも、「楨形」をしたお好み焼きなんてめったにお目にかかるない。「お持ち帰り用のへぎにぴたりと収まる形じゃけえ」ということだが、小面積の鐵板を最大限に有効活用する形とみた。



# 見たい！ 知りたい！ 伝えたい！



琉球使節の江戸上りと御手洗

豊町の郷土史研究家、木村吉聰先生（36才）が、「琉球使節の江戸上りと御手洗」を上梓されました。江戸時代、琉球使節団は合計9回、御手洗港に寄港しているそうです。2年前、満舟寺観音堂にあつた琉球使節団一員の手による一枚の額との出会いから、約一年かけ全国各地より集めた資料の集大成A4判170頁、送料込一部千円。

●問い合わせは

℡08466(6)6-2435今崎まで

「地域住民自ら多様な発想を持ち寄り、団体の活動を活性化させ、行政と住民が一体となって地域づくりに取り組んでいざ」として、重伝建を考える会が自治大臣賞を受賞しました。皆様の努力と協力でいたいたい賞。この喜びを大切にこれからもみなさんと一緒に歩みを進一步前進してまいりたいと思います。

琉球使節の江戸上りと御手洗  
●御手洗の郷土史本著者 聰さん  
資料を収集、本を出版



●自治大臣賞を「アドバイス」  
自治大臣賞を「アドバイス」

古い写真を探しています！

昭和、大正時代の御手洗の街角が写った写真や資料を探しています。人物写真の背景にちらつと写っているものでも結構です。お持ちの方は、左記までご一報ください。

「みたら通信なんでも伝言板」では、皆様のお便りを募集しています。  
●御手洗で見つけたおもしろい人物写真の背景にちらつと写っているものでも結構です。お持ちの方は、左記までご一報ください。

または最新情報

●御手洗を訪れた感想・希望  
この他、いろいろなこと、載せたいこと、みたら通信なんでも伝言板」係  
どしお寄せください。  
本誌でお便りや情報を掲載させて頂いた方には、もなく記念品を差し上げます。  
お便りお待ちしています。

宛先／〒734-0302

「重伝建を考える会」今崎仙也  
「みたら通信なんでも伝言板」係



■編集室より

豊町の俳句を特集しようと少し調べてみるとどんでもない分量になってしまつた。これこそ豊町の宝であろう。本特集で見落としている句牌や句集などあればどうぞお知らせください。



●自治大臣賞を「アドバイス」  
自治大臣賞を「アドバイス」

大  
暮  
集

●土地・建物のご用命は●

# マルヤ不動産

代表者：丸谷昭彦

〒735-0007広島県安芸郡府中町石井城2-17-31

☎082・282・5441

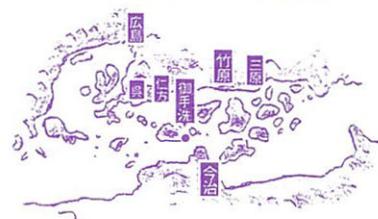


## MITARAI since1666



- 寛文6年（1666）町屋敷割りを藩より許され、  
人家が建ちはじめる  
正徳3年（1713）町年寄り（大長村の統轄下）が置かれる  
宝曆9年（1759）常盤町を中心とした大火（11月）  
文化3年（1806）伊能忠敬が御手洗を測量した  
(3月1～3日)  
5年（1808）町庄屋が独自に置かれる（初代柴屋）  
文政9年（1826）シーポルトが寄港する  
11年（1828）千砂子波止の築造（11～12年）  
11～13年（1828～30）住吉神社造営（大阪 鴻池善右衛門寄進）  
※千砂子波止の築造以後、  
住吉町の埋立てが進んだ  
嘉永6年（1853）吉田松陰が長崎行きの途中に立ち寄る  
元治1年（1864）三条実美ら五卿が多田勘右衛門宅  
(竹原屋)に奇遇する（7月22日～24日）  
明治12年（1879）御手洗町が大長村より独立  
昭和31年（1956）1町2村合併して豊町となる  
平成6年（1994）国選定 重要伝統的建造物群保存地区  
となる

## ●御手洗までの交通●



- 広島から大長まで…高速艇で約1時間30分
- 呉から大長まで…高速艇で約1時間
- 仁方から大長まで…高速艇で約40分
- 竹原から大長まで…高速艇で約40分
- 三原から大長まで…高速艇で約60分
- 今治から大長まで…高速艇で約30分
- 大長から御手洗まで…徒歩で約15分

「いろいろな人に  
伝えたいんで欲しい!!」

「みたらし通信」を友人、知人または豊町出身者に配りたい！  
等で本誌が余分に必要な方は左記奥付住所の「重伝建を考える会」  
今崎までお問い合わせください

この情報誌は  
再生紙を使用  
しています。